



1.2. 糸が水に濡れないように巻き上げる／3. 辺りが暗くなる中、鳥居を建立。ことしは鳥居の裏面に地域住民が文字入れをした

10月21日(金) 弁天様のお祭り 島へ渡り、津奈木の無事を祈る

「弁天様のお祭り」は旧暦9月26日、弁天島が陸続きになる干潮時に開かれています。昔は松田家と千々岩家で祭りを続けていましたが、次第に1人でするようになりました。

古くから伝えられてきた作法にのっとり、旗を揚げ、赤飯やお神酒、みかんなどを奉納。みんなで手を合わせ津奈木町の未来を祈りました。松田さんは「1人で続けるのは大変だったので、皆さんが参加してくれてありがたい。きっと先祖や弁天様も喜んでくれると思う」と感謝の気持ちを伝えていました。

陸へ戻るとテーブルを囲んで直会^{なおらい}が開かれました。煮しめやえびめし、ひじきや豆腐などを丸めて揚げた「ヒロス」など、地元のお母さんたちが作ったごちそうに舌鼓を打ちました。かつて弁天島で遊んでいた話や海辺でビナを拾った話など、昔の風景に思いをはせました。古くからお祭りは過去と現在をつなぐ役割も担っていたかもしれません。

10月16日(日) 糸あげの日 糸を引き上げ、鳥居を元に戻す

展示した《海渡り》の赤い糸を引き上げ、鳥居を元に戻す「糸あげの日」が開かれました。参加者約30人は島から陸へと糸を濡らさぬよう丁寧に巻き上げていきました。102本あった糸は無事に回収され、綺麗に手入れされた鳥居が島へと戻されました。

この鳥居は約20年前に台風で倒壊したままとなっていたが、プロジェクトが進むにつれて「鳥居を建て直したい」という地域の強い思いから、地元大工さんの協力を得て昨年再建されたものです。ことしは地域住民の手によって新たに奉納の文字が入れられました。

参加者からは、鳥居のある元の姿に戻ったことへの喜びと、これまで見てきた島の風景が不思議と新しい風景に感じると声が上がっていました。五十嵐さんは「《海渡り》を通して、自然との関わりや自分自身を見つめ直すことで、懐かしい風景が新しく感じたのかもしれない」と話していました。



1. お神酒や果物などをお供えをしてお祈り／2. 急斜面を慎重に登る／3. 海辺のシェルターで地元のお母さんが作った手料理で直会



旧赤崎小学校で津奈木小学校3年生42人が、日本伝統の技法である「組みひも」を体験し、ブレスレットを作りました。講師を務めたのは、事前にレクチャーを受けた保護者を中心。この日のために準備を進めてきました。児童たちは教えてもらいながら上手に手を動かし組み上げていきました。

鶴長小花さん（丸岡）は『海渡り』の話聞き、たくさんの人の思いや協力で糸がつけられたことが分かった。組みひもは作れるか心配だったけど、やっているうちに楽しくなってきた。今回経験したことを生かしながら、これからもいろいろなことに頑張りたい」と満足した様子。五十嵐さんは「ブレスレットや描いた作品を見た



コツをつかんできれいに組み上げていく児童

ときに今日のことを思い出してほしい。いつか組みひもで100本の糸を作り、《海渡り》の糸として張るのが目標」と話していました。

屋外作品《入魂の宿》（柳幸典作）の鑑賞や赤崎の海でお絵描き、磯遊びなど机上では学べない「生きた学び」を体験。元気な笑い声が響き、児童にとってかけがえのない思い出になったようです。



事前に組み方を学ぶ講師



海や弁天島、《海渡り》を描く



作ったブレスレットをみんなで見せ合う

10月7日(金) 津奈木小学校組みひもワークショップ
未来へつなぐ糸を、みんなの手で――